北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ ikor
SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	スコットランド人を示す特性としてのスコット
Author(s)	根本, 愼
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 3 号: 19-25
Issue Date	2000 年
DOI	10.15114/bshs.3.19
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6572
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192319.pdf

・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

スコットランド人を示す特性としてのスコット

根本　　愼
札幌医科大学保健医療学部一般教育科

要　　旨

スコットランド人を表す特性の一つとしてその言語を構成するスコット(Scots)が挙げられる。現在、スコットは一様に用いられるのではなく、地域の特徴を持った言葉として受け取られる。しかし、この言葉は、スコットランド国民の歴史と遺産を伝える言語である。残念ながら、スコットの勢いは盛んであるとは言えないが、この言語普及のために多くの努力が払われてい る。

これまでに行われた調査報告を参照すると、スコットランド人としての意識がある一定の高さを示している。地方分権が実施に移され、今後のスコットランド人固有の制度と遺産を守れるかは、これからの住民よる運営の結果次第である。住民が地域の運営に自信を持つことができるならば、スコットに対する見方や態度も向上するであろう。スコットランドの住民が、固有の遺産を守り通そうとする一方で、英国は、ECへの参入を初めとする広域化にも動き出そうとしている。

<索引用語＞スコット、スコットランド人の特性、地方分権、民族国家

Ⅰ　はじめに

最近のスコットランドの動きは変化に富んでいる。その主なものには、1996年11月末に「運命の石」が返還され、1997年５月の総選挙では、労働党が議席を伸ばし、ブレア政権が誕生した。更に、ブレアはスコットランド、ウェールズに対する分権化を提案、住民投票により、地方議会の設置が決定したことなどが挙げられる。

「運命の石」は、代々のスコットランド王がこの石の上で即位したと伝えられるもので、英国の現行王位継承の儀式にもこの石が700年に渡り使われて来た。比較的最近のことになるが、1950年にはスコットランドの学生３名がこの石を奪還しようと持ち出す事件があったほどに、スコットランドのシンボル的存在となっていた。今後も英国国王(女王)即位の際には、ロンドンウェストミンスター寺院に運ばれることになるという。この石に対するスコットランド人の反応は様々であるが、スコットランド自治推進派の人たちを勇気付けることとなった。

1997年に成立したブレア政権は労働党の政策の一環として、地方分権を提案した[1)]。スコットランドではその提案は住民投票によって支持され、地方議会の設置が決定した。地方議会議員選挙は1999年５月に行われ、選出された地方議会議員はその活動を始めたばかりである。約300年ぶりに復活した地方議会は、エディンバラ市内、エディンバラ城に対峙するホリルード宮殿近くに建設されることが決まっている。現在、建物の設計について様々な提案が行われている。部分的ながら自治権を獲得し、今後の方向については多方面で議論が行われている。

英国労働党が1997年に発表した宣言での中で、地方分権に関連して次のように述べていた。：

> 連合王国は、際だった国民的アイデンティティと伝統的に培われた地域の人々のパートナーシップに支えられて成立する。スコットランドは独自の教育システム、法制度および地方政府を持ち、ウェールズはそれ自身の言語と文化的伝統を持つ。我々レイバーは、住民投票で有権者の40%以上の賛成が得られた場合は、スコットランドとウェールズへの分権を支持する。我々の提案は、連邦制ではなく分権である。スコットランドに対しては、我々レイバーは、立法能力のある議会を作るよう提案する。そうすることによってスコットランド議会は、現在スコットランド当局が行政的に行っている権限に対して、民主的なコントロールを拡

著者連絡先：根本　愼　060－8556 札幌市中央区南１条西17丁目　札幌医科大学保健医療学部一般教育科

大するだろう。（舟場正富､1988：169－170）

ブレア政権は、地方分権が可能な項目は委譲し、経済・防衛・外交に関するイギリス議会の権限は従来通りとし、スコットランドなどの独立した地位を認め、英国を連邦国家としてではなく、一つの国として進もうとするものである。それによって国際社会、特にＥＣにおける指導的立場を築こうとしている。そのためにも、この宣言ではスコットランド、ウェールズ独自の制度、文化の存在を明確に認めていることは注目すべきことである。

スコットランドには、イングランドに隣接する王権国家として独自の歴史を持つ時代があり、現在でもスコットランドの固有の特性として、教育制度、法制度、宗教の面などにその特徴が見られる。それは、1707年の議会統合の後も一般住民の生活は従来通り保持できたこともスコットランドの特性を持ち続けることが可能であった一因である[2)]。言語面においてもスコットランド固有の状況がある。11世紀頃に、スコットランドの君主はイングランドの進んだ社会的文化的様相に興味を示して、土地を与えるなどして次第に聖職者を含むアングロサクソン系やノルマンフレンチ系の人々を受け入れた。これに伴い、イングランド北部方言が次第に使われるようになり、その受容の過程で、従来の言語であるゲール語との接触により選択的な取り入れによるイングリス（Inglis＝English）と呼ばれる形態ができあがった。この言語がスコット（Scots）と名付けられたのは16世紀以降のことである。スコットランドの言語として成立したスコットはスコットランド人民の言語として、文化的にも優れた遺産が産み出された。しかし、1603年の王権統合を境にイングランド英語が浸透した。その後、18世紀から19世紀の初頭に渡って、スコットランド啓蒙主義の時代といわれる学芸の盛況期を迎えたが、正式な表現言語としてはイングランド英語が用いられた。スコットランドの言語として、スコットが用いられていた間に、イングランドの英語は、部分的に独自の変遷をたどり、スコットランドで受け入れた言語形式とは異なる部分が生まれた。同じ言語が、異なった地域で用いられる場合に、一方は受け入れた形を守り、他方は独自に変化することは、よく見られることである。

イングランド英語が優位を占める一方で、スコットは一般に用いられる俗語的言葉として存続することになり、教養ある人々の言葉とは見なされなくなった。20世紀に入ってHugh MacDairmid 等によるスコット復興の運動が見られたが、スコットの話し手は各地域の言葉として日常生活の中で使われ、伝えられて来た。このような状況下で、スコットはイングランド英語から乖離した言葉とされ、*debased, denigrated, corrupt, distorted, stigmatized* などの形容を受けるようになった。地政学上の位置が変わり、一国の言語である地位から、‘One nation's language is another's corrupt dialect’と言われる状態に陥った。

言語としてのスコットが現在まで保持できたのはスコットランド域内の人的移動が特定の都市部を除き比較的安定していたり、緩やかであったと考えられる。しかし、地域ごとに異なる方言、例えば、アーバーディン地方のドーリック（Doric）、ララン（Lallans ＝ Lowlands Scots）などが成立し、スコットランド全域に渡って用いられる言葉としての一般型を提示できないほど、地域性が強い面もある。このため特定の方言を基にした、綴り法を採用する試みも大きな議論を引き起こしてもいる。地理的にそれほど広くはない英国でこのようなスコットが観察できるのは、地理的にそれぞれが独立した地域であり、接触の度合いが少ない間にイングランド英語とスコットは異なった面で独自の変化をしたことになる。スコットの側でも独自の変化や、表現スタイルの創造により、イングランド英語との間で意味が伝わらなくなるという面も現れ、異なる言語の様相を呈する。このような背景を持ちながらもスコットは、英国（Great Britain）の中でスコットランド人の歴史と遺産を伝えるものとして、また、住民の言葉として細々とその命脈を保って来た。

本稿では自治権の拡大が現実となったスコットランドにおける言語の構成要素であるスコットの現状、スコットランド住民に対するスコットの意義と今後の存続の可能性について述べるものである。筆者がスコットランド滞在中に収集した文献資料を主としつつも、J. Corbett 博士（グラスゴー大学）、J. McClure（アバーディーン大学）、G. Philip 博士（Scotsoun Publications）の諸氏から受けた参考意見をもとに本稿を作成した。

Ⅱ　スコットの現状

スコットを考える場合の参考例として、現代グラスゴー方言の文字転写例を挙げる。これはグラスゴー地域で観察された口語表現の転写記録である。

> Aye－what was it noo－Ah heard this wuman saying, an Ah was laughin, see. What did she say for ‘rinsin’？ She had this soapy waater aw left, see. An she went, ‘Aw, that's a shame tae wast thon ...’－an what did she say? It was a right auld-fashiont word. Au, Ah cannae remember. An Ah mean－‘sapple’！ ‘That's a shame tae waste thon sapple.’ It was aw this lovely soapy waater, see, an she'd only waashed wan wee thing in it, an she went, ‘Anything else tae get waashed? That's a shame tae waste thon sapple.’ Ah thoat that was dead funny.（Montgomery, 1994：41）

グラスゴー方言では、音声面から見ると、イントネーション、アクセント、ピッチ等に英国標準語との違いが見られる[3)]。このグラスゴー方言に出てくるいくつかの語について、次のような標準英語との対応が与えられると、この資料の構成は現代英語のシンタックスに対応している。

Ah = I, an = and, aw = all, aw = oh, aye = yes
laughin = laughing, nae = not, noo = now
sapple = soap, sayin = saying, tae = to
thon = over there, waashed = washed
wan = one, aw = all, wee = little

Ah, wan, aw, nae 等は英語からの変異音であり、wee, sappleはスコット独自の言葉である。noo は受け入れた時点の音価を現代まで留めているもので、英国英語で15世紀から18世紀にかけて起こった大母音推移と言われている長母音の高舌化と二重母音化に関連している。

Montgomery（1994：45, 49）はスコットランドにおける地域方言の存在について、次のように述べている。：労働者階級の人には、評価の高い標準語の存在を知ってはいても、自らの言葉遣いに安定感、一体感を感じて自分の言葉としている。また、アクセントについては社会階層が低くなるほど地方に特有の変異を持ち、社会階層が上になるにつれ標準英語（RP＝Received Pronunciation）に収束していく傾向にある。アクセントの違いを大切にするのも上位方言、より評価の高い標準英語に対する反発にある。スコットを用いる人は標準英国英語を軽蔑的に上品とか気取っていると受け取っていて、自らの地域方言を親しみのある話し方と考えながらも、その独特の訛りを持った話し方が公式の場では適切ではないとも感じている。

英語として統語上共通の基盤に立っていて、音声上の違いはあっても、その違いがコミュニケーションの上で特に支障をきたす程度でなければ、お互いが理解可能であり、問題は起きない。しかし、音声、語句の面で異なり、面識のない人同士の言葉によるコミュニケーションになると、意志疎通に支障が出て来る。

英国英語と統語的、語彙的な親近性があるとするなら、スコットは一つの変種であり、独立した言語と言えるか疑問が生じて来よう。イングランドの北部方言受け入れの過程では従来の母国語である、ゲール語を母胎とした受容であり、ゲール語とイングランド北部方言との接触から始まったクレオール（creole）的言語様態であることが、スコットの文法形態を産み、社会の様相を表すイングランド英語とは異なった表現を生み出したと考えられる。スコットとイングランド英語が類似の言語であっても、異なった国として、隔絶された要素もあり、ある時期まで共通であった言語形式が一方で変化する例は長母音の相違にも見られる。言語は変わり行く可能性と、言語形式を変えずに保存してゆく可能性を持つ。言語が変わるためにはその変化を引き起こす、言葉の使い手が居て、イングランドとスコットランドの話し手のいずれかが、ある時期に地域全体として異なった方向に言語行動を取ったにすぎない。

McClure（1997）はスコットの特性、重要性を次のような点にあるとしている。：ａ）W. Scott や R. Burns らによってスコットによる優れた文学作品が産み出されており、スコットランド人固有の大いなる遺産となっている。ｂ）独立国としてのスコットランドが周辺諸国との交流を通して取り入れた諸国の言葉を記録する歴史的言語資料としてのスコットであり、語彙の中にイングランド英語はもとより、ゲール語、フランス語、オランダ語、古ノルド語、ラテン語が取り入れられている。ｃ）スコットランドの人々が生活の中で永きに渡ってコミュニケーションの手段として用いられて来た言葉であること。ｄ）スコットランド人を指し示す固有の財産としてのスコットであり、その言語によってスコットランドの国、人を表すことができる存在である。

Corbett（1998）は、15世紀から20世紀に渡って行われたスコットへの翻訳の歴史を辿っている。翻訳がスコットによる文学作品の質を高め、かつスコットによる日常表現 に評価を与え、作家はそれによって表現スタイルの幅を広げることができたとしている。 翻訳が古くから一般的に行われて来たのは、スコットランドの言語が独立した言語として 機能してきたからである。

スコットは、その起源からイングランド英語と密接な関係を持ちながらも、独自の展開をして来た、スコットランド人の思考と感覚を表す、スコットランド社会を写す言語である。それ故、固有の財産として保持、継承すべきだとMcClure（1998：68）は主張する。

McClureは、このような意味で、スコットをスコットランド人であることを示す、独立した一言語であると考えている。 Kay（1993：152）も、スコットよりも話し手が少ない言語でも確固たる地位を築いている例が現実にあり、スコットはそれより多くの話者を有しており、独自の言語たる十分な資格があると考えている。また、英国英語とスコットの違いを北欧３国や、チェコ語とスロバキア語などの違いよりもその程度はよりも大きく、また、その話し手の数を考慮すると独立した言語たる十分な資格があると述べている。しかしながら、スコットの状況は必ずしも広く受け入れられている訳ではない。McClureは、この様な現状をを憂い、スコットを積極的に維持、普及させるよう、スコットに対する態度・見方を早急に改めるべきだと主張している。：

Unquestionably Scots was once a language;

unquestionably it has the potential to become one again. But to make it so is not only, perhaps not even principally, a matter of changing the tongue itself, but of changing its speakers' attitudes towards it. Popular impressions can be changed; and when they are mistaken impressions, it is a matter of importance that they should be. The task of those who are concerned for the future of Scots is to persuade the Scottish people that we have, as a unique national possession, a highly distinctive and expressive tongue which is also vehicle for a literature of great antiquity, merit and durability. And if we wait until we have "proved" Scots to be a language before embarking on this task, we assuredly never will.（McClure, 1997：24）

McCluremもKayも共に、スコット普及のために教育の場やメディアの場でスコットが取り入れられることを提唱していた。この様なスコット普及の措置を講じる必要性が唱えられる中、70年代に入り、英国内のＲＰ（Received Pronunciation）を絶対視する傾向に変化が現れてきた。70年代に入ると多様な社会・文化的様相が展開し始めた。それは、ビートルズに代表される若者文化であったり、カウンター・カルチャーの現れなどであった。言語面でも従来のＢＢＣ英語を重んずることから次第に地域の言葉を取り上げる番組がＢＢＣウェールズ、ＢＢＣスコットランドに現れ始めた。また、スコットの普及に留まらず、スコットランドにおけるケルト文化の掘り起こしのために、関係団体への財政援助が行われるようになり、ゲール語の普及にも力が注がれるようになった。このような状況は、スコットが社会の中で受け入れられるためにも好ましいことであった。しかし、これらの財政的支援もその時々の情勢に影響されて縮小を余儀なくされることもあり、それぞれの活動を継続することは容易ではない。

スコットの学習を教育カリキュラムに取り入れることも70年代には始まっていた。Niven and Jackson（1978）の報告では、行政担当者が、教育要領の中でスコットを教えることの意義を述べており、スコットを教える環境が整えられてきている状況と共に、教える現場で起こる問題や戸惑い、スコットを扱うことのできる教員養成が十分でないなどの問題も指摘されていた。このように、スコットに対する環境は、徐々にではあるが変わりつつあり、スコットランドにおける日常の生活で、見かけるスコットに違和感は感じられない。

Ⅲ　スコットランド人としての住民意識

スコットランドが英国の一地方として歩み始めてからほぼ400年の間に中央政府の下での英国化の影響も受けていたと考えられる。Brown et al. は、1997年の総選挙直後に行われた調査（British Election Survey = BES1997）を初めとする、スコットランド人としての帰属意識について調査結果を比較し、次のような表で提示している。

表１　National Identity（per cent）

Respondent Feels：	*July 1986*	*Sept.1991*	*SES 1992*	*SES 1997*
Scottish not British	39	40	19	23
More Scottish than British	30	29	40	38
Equally Scottish and British	19	21	33	27
More British than Scottish	4	3	3	4
British not Scottish	6	4	3	4
None of these	2	3	1	4
Sample size	1021	1042	957	882

Sources:July 1986:Moreno（1988）; September 1991:*The Scotsman*; SES 1992: *Scottish Election Survey*（1992）;SES 97:Scottish Election Survey（1997）.

（Brown *et al.,* 1998:209）

この表によると、調査期間ほぼ10年の間に、前半と後半で全体的な数値が変化している。英国人ではなく、スコットランド人であると明確に意識している人は、後半の数値に減少が見られる。その減少部分に対して、スコットランド人であるという帰属意識が比較的低いグループ－どちらかと言えばスコットランド人と考える人々；スコットランド人であり、かつ英国人であると考える人々－の割合が後半では増えている。しかし、この期間後半部の調査ではスコットランド人であると意識しているグループは約20%を占め、英国人かスコットランド人いずれかと問われるとスコットランド人であると感じている人は30%前後いるので、この両者を合わせると60%になる。何をもってスコットランド人とするかは、定められないが、ある新聞社の調査では、58%が生地としてのスコットランドを挙げ、39%の人が居住地、18%の人が、スコットランド系の子孫であることをスコットランド人である根拠としている[4)]。

Brown et al. はこの帰属意識について、1997の調査を他の要素（地域別、社会階層別）から見てもほぼ同様の分布になるとしている。Brown et al.（1998：215）はスコットランド固有の制度、特に、教会、教育制度、法制度、バラ（burgh）を単位とする自治組織などが働き、スコットランド独自の地域社会としての今日まで続いてきたことの影響が強いのではないかと考えている。

現在でも、スコットランド人としての自覚を持つ人々がこのように存在することは注目に値する。しかし、住民の政党支持率を見ると、主要な政党に分かれている。スコットランド人としての意識があっても、同じ考えで、同様な行動をする訳ではなく、現実の問題に対する対応

を一つにまとめることはそれほど容易ではないと思われる。一部にはスコットランド独立派の様に、スコットランド人からなる国(nation-state)を創り上げようとするグループが従来からあるが、英国の中でスコットランド人として過ごしてきた状態(state-nation)からの分離案が簡単にスコットランド内で容認されるほどの状態にはない。それぞれの考えを持つ人たちが存在する微妙なバランスの上に立っているのが、今日のスコットランド社会ではないかと考えられる。

確かに、イングランドとの統合後の歴史の中で挫折感を感じている人も多い。古くはジャコバイト（Jacobites）の反乱(1745－1746)に対するハイランドの掃討にまでさかのぼる土地所有問題から、比較的新しくはサッチャー政権下で、地方政府の財源として、新たに地方税(コミューニティー・チャージ)を設け、他の地域より１年先にスコットランドでその徴収を開始したことはスコットランドのみならず、イギリス全土で反対が盛り上がる結果となり、保守党のスコットランドにおける支持率が英国全土の中で際立って低 かったことなど、種々あることも確かである。

この度の地方議会の開設に至った地方分権も簡単に実現したわけではない。地方分権案は古くから唱えられていた選択であり、分権獲得のためには永きに渡って要求を維持しなければならなかった。20年ほど前の1979年にも、労働党政権のもとで住民投票が実施され、過半数を獲得しながら規定を満たすことができず、分権が実現しなかった経緯がある。これから後、スコットランドでは暫くの間無力感が支配し、その後の保守党政権の動きに対しても見過ごす雰囲気が見られた。世論調査からもわかるように、スコットランドでは英国の他の地域と比較して保守党の支持率が際立って低く、1974年以降の保守党支持率は、1979年の31.4％を除くと、20％台の数字が続き、1997年の総選挙では17.5％を示している[5)]。

このように分権化の実現一つをとっても、簡単には処理できない複雑さがあり、世代の進行と共にスコットランド人としての意識も変わる傾向が前掲の表からも窺うことができる。

Ⅳ　これからのスコット

スコットは現在、スコットランド社会で広範囲に受け入れられているわけではない。標準英語の影響が大きい中で、現実の生活で用いられる英語とスコットを明確に区別するのは難しい。過去の遺産に見られるスコットと現代英語との違いの方が大きいとも言える。語句表現として一般に用いられるスコットや特定の社会層で、日常使用されているスコット表現を除くと、言語としてのスコットは、現在、大変危うい状態にある。スコット普及のための手だては徐々にではあるが、整備されて来ているが、今後の見通しはかならずしも定かではない。

スコットランドでは議会開設を迎え、自らにとって重要な事柄を処理できる機会が生まれて来た。分権化により、スコットランド住民の裁量権は広まったように見える。この分権化を自治(Home Rule)と受け取る人もいる。しかし、中央政府が期待するのは各地方政府が、保健医療サービス、地域産業、環境等についての財政責任を明確にすることである。自治権の拡大は地方政府の判断、または、処理の結果に対しては責任が生じることになる。この一方で、結果次第では自治権の行使によってスコットランド人としてのプライドと活力を取り戻すことができる。

地理的にはロンドンを中心とするイングランドとは異なった地域であるという感覚が住民には依然としてあり、人口約500万を擁するスコットランドは一行政単位として自立する可能性を十分に持っている。この自決権を有効に行使することによって地域運営が可能になれば、住民の意思が実現することによってスコットランド住民の自らに対する見方も変わってくるはずである。

地域とその住民の特質については、客観的に観察できる面も存在するが、住民が生活の中で重要であると考える事柄もその住民を表す固有の特性となる。その意味では、彼らの言語の一部としてスコットが単なる過去の痕跡となるのか、生活の一部となるのかは、スコットランド社会の今後の動きに深く関わっている。スコットランド住民の自決権に期待しなければならない程の状況になっているのがスコットの現実である。

スコットランドという地域に生活する人々が用いかつ自らと一体化した地域社会共有の存在となってこそスコットは、その地域を顕わす特性となることができる。住民が、地域社会を自分の生活基盤としてある程度の満足感と誇りを持つことができてはじめて、自らの言葉に自信を取り戻すことができる。そのような機会をスコットランド住民は、今迎えている。

スコットランドの住民が、その独自の社会、歴史と遺産を保持して行こうと志向するその一方で、ＥＣを初めとして広域的な活動のために多元的な要素を受け入れる共生が必要となるグローバリゼイション(globalization)が進んでいる。英国はＥＣの一員として共同歩調をとるべきかを明らかにする時期に来ている。スコットランドも分権化により、地域社会に注意を集中させる一方で、スコットランドにおける諸活動もこの広域化と無縁とは言えないであろう。

注)

１．これは、英国政治刷新のための提案を盛り込んだ白書、Scotland's Parliament(White Paper)である。主要な提案は次のような項目を含んでいて、権限の委譲、開かれた政府を創り上げること、国会の改革、個人の権利を増大することに主眼が置かれている。

a．英国の中でのスコットランド・ウェールズ住民に直接関係する諸問題を処理する権限を拡大するため両地域に地方議会を設置する。
b．ロンドン市長の権限・責任を拡大する。
c．欧州の人権概念を英国の法に取り入れる。
d．情報公開を押し進める。
e．下院議員の選挙方法についての国民投票

住民の参加・意見を取り上げる方策の一環として、スコットランドとウェールズに議会を設置することとロンドン市長の権限拡大は同質のものである。（サッチャー政権の元ではロンドン市全体の問題を扱う自治体組織は行政効率化のために廃止されていたし、その組織も公選による市長を持たなかった。）

2．Brown et al.(1998：215-216) を参照されたい。
3．現代グラスゴー方言の特徴について拙稿、根本 愼(1999)でその一部を報告した。
4．1992年３月に、新聞「スコットマン」が実施した調査による。
5．Brown et al.(1998：154)を参照されたい。

文　献

Brown, A. et al. 1998. *Politics and Society in Scotland* (2nd ed.). Hampshire：Macmilan Press.

船場正富. 1998.『ブレアのイギリス』東京：PHP研究所.

Kay, B. 1993. Scots： *The Mither Tongue*(Revised ed.). Ayrshire：Alloway Publishing Ltd.

McClure, J. D. 1997. *Why Scots Matters*(2nd ed.). Edinburgh：The Saltire Society.

Montgomery, M. and Helen Reid-Thomas(eds.). 1994. *Language and Social Life.* British Council.

根本　愼. 1999. “地方分権が進むスコットランドとその言語事情.” 札幌医科大学保健医療学部紀要, 第２号, 51－55.

Niven, L. and R. Jackson(eds.). 1978. *The Scots Language：its place in education*. Dundee：Northern College.

The Scottish Office. 1997. *Scotland's Parliament (White Paper).*

Scots as a symbol of the Scottish identity

Makoto NEMOTO
Department of Liberal Arts and Sciences, School of Health Sciences Sapporo Medical University

Abstract

The language of Scots can be counted as one of the dominant characteristics of the Scottish people. In terms of its status as a language, Scots is not uniformly accepted and is often regarded as a local vernacular. However, as it is the vehicle of the distinctive history of the Scottish nation and their heritage, it is worthy of the status of a language. Although the language has not remained alive during the last few decades, incessant efforts have been made to revitalize it. At the same time, people throughout Britain have come to be more open to local dialects.

Some surveys show that a high percentage of the Scottish people still maintain a fairly high sense of their national identity as Scottish people. With the acquisition of devolution, the Scottish people will be able to enjoy a wider range of Home Rule. It will be through this independence and by their own efforts that they will be able to safeguard their institutions and heritage including the Scots. There seems to be a contrast between the desire of a majority of Scottish people to maintain their unique heritage, and developments in the UK as a whole and beyond towards European community, further globalization.

Key words：Scots, Scottish identities, Devolution, Nation-state